

ローマ6章12-23節 「身を捧げる生活」

1A 差し出す自身 12-14

2A 仕える自身 15-23

1B 服従するものの奴隷 15-18

2B 聖潔への道 19-23

本文

私たちはローマ人への手紙 6 章を学んでいます。6 章から、私たちは、ローマ人への手紙の中で新しい内容に入りました。それは、「罪から来る罰からの救い」ではなく、「私たちが支配する罪の力からの救い」です。私たちは、悔い改めキリストへの信仰を持つことによって、神の怒りから救われただけでなく、今、この世に生きている間も罪に勝利した生活を歩むことができる、という祝福が与えられています。前者、つまり自分が神の前に有罪とされるのではなく、無罪の宣言を受けることを「義認」と言います。そして後者、罪から離れて、その支配を受けないで自由にされることを、「聖化」とも呼びます。聖なる神の姿に似てくること、キリストに似ることです。

パウロは、神の恵みの福音を宣べ伝えていました。「罪の増し加わるころには、恵みも満ちあふれました。(ローマ 5:20)」とまで言いました。それで、「パウロは、罪を犯すように教えている。」という非難があったようです。3 章 8 節で、「善を現わすために、悪をしようではないか。」と言っているとの誹りを受けている、と言っています。この誹りは、私たちも自然に抱くことではないでしょうか。自分の行ないではなく、信仰によることのみで神の前で義と認められるなら、ならば何の努力も必要ないではないか？というものです。自分の思うままに生きて、罪の中にいたところで、神を信じているのだから、恵みが満ちあふれるのだろうか？とってしまうのです。

パウロは、そこで 6 章では「絶対にそんなことはありません。」と言って、説明しているのです。神の恵みによって、信仰によって救われたのだから、罪に対しても神の恵みによって、信仰によって救われているのだ、と論じています。そう、神の恵みを真実に知った者こそが、罪から離れた生活を送ることができるのです。努力はするのです、しかしその努力の方法が全く変わりました。11 節に、「このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思いなさい。」とありました。思いなさい、あるいはみなしなさい、という命令を受けています。つまり、信じなさいということです。主が語られたことを真実なものとして、たとえそのように見えなくても、そのように感じなくても、主が語られたということで信じ切ることなのです。主の約束の言葉を信じて、心から受け入れるその信仰が、御霊によって私たちの心を清めます。そして、清められた心が良い行ないを結ぶ原動力となります。

例えるなら、自分が一日五千円だけの労賃のところ働いていた所、キリストという上司がやっ

て来て、「わたしが全て支払ったから、心配しないでもよい。ただ、この恵みによってわたしの下に留まっていなさい。」とされています。ところが、その全て支払ったという言葉があまりにも良すぎて信じられないため、自分は元々いた、一日五千円の労賃の職場に戻ろうとします。しかし、その誘惑を押し切って、キリストが全てを賄っておられるというのを信じて、その恵みに留まるのです。私たちの努力は、この方の言われたことを信じることに、その信頼に努力が必要なのです。

そして、そのキリストのしてくださったことの内容は何か？それは、「私が罪に対して死んでしまった」ということです。キリストが十字架に付けられた時に、私の古い人も十字架に付けられ、古い私が死んでしまった、ということです。ですから、私たちは全く頼りにならないことを知ることです。無能な肉を持っている、これをいかに生かそうとしても、そこからは罪しか出てこない、このことを悟り、そうみなすのです。私は既に死んでいます。そして、死んでいるからこそ解放されています。そして、「キリストが甦られたように、私も新しい命にある歩みが与えられた。」ということです。キリストが肉体をもって復活されました。そして、キリストにある者は、この体が死んでも甦ります。それは将来に起こります。しかし、たった今も、その甦りの力が私たちの地上での歩みに御霊によって注がれています。罪がもたらした死、これを滅ぼされたキリストは、私たちの罪の力を甦りの力によって打ち勝ってくださるのです。御霊によって、将来の贖いの先取りをしてくださっています。

1A 差し出す自身 12-14

12 ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に従ってはいけません。13 また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。

今日学ぶ箇所、6章の後半は、「捧げる」ということです。私たちが罪に対して死に、キリストによって神に対して生きている、という神のしてくださったことを、私たちの不断の努力で保っていくという作業が、ここの「捧げる」という言葉に表れています。これは、「差し出す」と言っても良いかもしれませんが、あるいは「ゆだねて、明け渡す」とも言えるでしょう。一つ一つの言葉を、じっくり見いきます。

まず「あなたがたの死ぬべきからだ」とあります。これは、私たちが持っている今の肉体のことです。これは、いずれ死んでいってしまうものです。なんで死んでいってしまうのか？それは、アダムが罪を犯し、それによって自分の肉体も滅びるために置かれたということです。そして「罪の支配」とあります。その罪とは罪の性質のことです。それで「情欲」とあります。情欲というのは、性的なことだけでなく、他のあらゆる肉体に関わる、行き過ぎた欲望の表れです。生理的欲求は、それぞれは神から与えられているものです。食べること、セックスをすること、これらは神に祝福されるものです。しかし、神に与えられた範囲外でその欲求を、神の栄光のためではなく、自分のために満たそうとする時にそれは情欲になります。ですから、ここでは罪の支配というのは、外側の行ないの罪だけではなく、情欲という内から出てくるもの、体にある罪の性質から出てくるものを指して

います。

つまり 12 節は、以前の生活のことです。この体は、ただ死ぬべき体であり、遠く昔はアダムが罪を犯したためにその定めを受けた体であります。そして、私たちはそこにある罪の性質に、その体を明け渡していました。そして、内からは情欲が出てきます。ただその情欲に従って動いていました。ここでのギリシヤ語の時制は、「継続的に行なっていた」という意味合いがあり、自然に行なっていた、習慣的に行なっていたということです。それを止めることです。止めることができます。クリスチャンなのに止められないと言っているのは、脚を骨折してギブスを嵌めていたところ、完全に癒されたにも関わらず、そのことを信じられなくて、未だにギブスを外したくない、そして松葉杖で歩くことを止めたくないと言っているようなものです。けれども、もう癒されました。だから、あとは新しい習慣に挑むことだけです。古い習慣に固執しないことです。

そして、「あなたがたの手足」とあります。具体的な体の肢体、体の部分のことです。「私は心では、主に仕えていると信じています。」と言って、実際にこの体で行っていることは正反対である、ということは、キリスト者に与えられている聖さではありません。パウロは 12 章 1 節で、「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。」と言っています。動物のいけにえが祭壇で捧げられますが、もちろん私たちは屠られることはありませんが、この体が生きたいけにえであります。心と体は離反していません。

そして、この手足を「不義の器として罪にささげてはいけません。」と言っています。次に、「その手足を義の器として神にささげなさい。」と言っています。ここの「器」は、容器のことではありません。「武器」とも訳すことのできるものです。あるいは、「所有物」と訳してもよいでしょう。武器として訳すなら、それは戦いの時の武装解除のことを話しています。日本が連合軍に敗れた時、8 月 15 日が終戦記念日ですが、その日以来、世界各地にいる日本軍は、そこにいる連合軍に自分たちの武器を差し出しました。もはや、我々はあなたに戦闘するつもりはない、とその意思を表している訳です。自分が誰に降伏しているのか、それを明確にする立場です。ですから、ここでパウロは、自分の持っている手足という武器を、罪という主人に明け渡してはならない、そうではなく、神に明け渡しなさい、と言っています。

そして「所有物」という意味合いで使うなら、自分は罪という主人の召使いになるのではなく、神の召使いになりなさい、ということです。奴隷と言った方が良いでしょう。奴隷は自分の所有物はないのです。自分の所有しているものを、全て神の前に持ってきます。そして神の所有とします。

ですから、私たちキリスト者生活は、信仰から始まり、信仰とは「明け渡す」ことそのものだ、ということです。自分は神の子どもになりました。全ての良き物は神から来ていることを知り、この方に頼り、この方に任せ、そしてこの方の言われることに聞き従います。主が言われることに対して、「はい、その通りです」と言って、そのことを行なうのです。この信仰の立場はとても単純であり、自

分を解放し、安息を得ることができる立場です。神の愛と恵みに触れた人は、このことを喜んで行います。

そして、「死者の中から生かされた者」と言っていますね。先ほどの、罪に対して死んでいたが、キリストにあつて甦ったという、自分の新しいアイデンティティーです。体の甦りを約束されていますが、すでにその復活の力が私たちの内に働いています。だから、義のためにこの手足を神に捧げることができるのです。

それから、「あなたがた自身とその手足を」と言っていますね。手足のみならず、その前に自分自身を全て、神に捧げるのだということです。したがって、私たち信者はすべて神に対して献身した者です。キリスト教会で「献身者」という言葉が使われます。それは伝道者や牧会者のことを指しているのですが、それは語弊を生んでいます。私がある人と話していて、その人は、献身をするというのは宣教師や牧会者、あるいは専門的に教会の奉仕に携わる人々だけがするもので、自分はその範囲内にいないと考えているようで、びっくりしました。私たちは、教会においてすることあらゆることが、神の前でのいけにえ、生ける供え物なのです。何一つ、聖なる営みから外れるものはないのです。もし分けているのであれば、そこに神の生ける御霊の原理が働かず、肉の行ないが出てくることでしょう、いや、教会内どころか、自分のしていること、食べること、寝ること、すべてが神の前での捧げ物です。「1コリント 10:31 こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。」

14 というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。

ここの、「というのは」という接続詞が大事です。あなたがたが、恵みの下にいる、律法の下にいるのではないから、だから罪があなたを支配することはない、ということです。恵みの下にいれば、罪の言いなりになってしまうという懸念とは裏腹に、恵みの下にいるからこそ、私たちは罪から自由にされており、その恵みが私たちの内に働くのです。神の恵みが、私たちを罪の罰から救っただけでなく、罪の力からも救いました。キリストの十字架は、私たちの罪の罰を負っただけでなく、罪の力を無効にしてくれたのです。

そして、その恵みは私たちが自分自身を、その手足を主なる神に明け渡し、差し出すことによって私たちの内に作用します。私たちは、神を信じる、キリストを信じると言いながら、実は自分自身を信じているという、非常に悪い意味でのプライベートの部分が心の中に残しているという課題があります。そうすると、罪の原理が働いて私たちが願っていること、霊においては願っていることをできないようにさせるのです。この葛藤については、7章で学びます。けれども、私たちが全く主に自分自身を明け渡す時に、罪からすでに自由にしたという神の恵みが働くのです。

2A 仕える自身 15-23

1B 服従するものの奴隷 15-18

15 それではどうなのでしょう。私たちは、律法の下ではなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう、ということになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。

パウロは、再び恵みの福音に対する非難に対する反論を始めます。「律法の下ではなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう」とお前は言いたいのか、という批判ですが、もちろん絶対そんなことはない、ということです。この言葉は 1 節と若干違います。1 節は、「罪の中に留まるべきか」という問いかけでした。こちらは、「罪を犯す」という問いかけです。1 節は罪の中に恒常的にいることを指しているのに対して、ここ 15 節は「一度、二度、罪を犯してもよいだろう」という意味合いで使っています。果たして、私たちが恵みの下にいるから、一度、二度、罪を犯しても大丈夫なのでしょうか？そこでパウロは重要な原理、というか、人の成り行きについて話します。

16 あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。

私たちが一度、何かに身を捧げるとその奴隷になるという原則です。私たちは、何かの行為に対してそれから大した影響は受けないと思っています。自分は基本的に主体的な存在で、何からも自由にされていると思っています。いいえ、私たちは誰かに仕えているはずの存在なのです。ですから、もし罪に額づくのであれば、その罪がその日から自分の主となります。罪に引きずりこまれて、自分自身は自由ではないことを発見します。そしてその行き着くところは死です。その反対も同じで、神に額づくのなら、どんなことがあっても、主は私たちを義へ導かれます。

17 神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの規準に心から服従し、18 罪から解放されて、義の奴隷となったのです。

ここが福音です。私たちは既に罪の奴隷から解放され、義の奴隷とされているのです。そこで大事なのが「信仰」です。ここでは、信仰の心の状態を「伝えられた教えの規準に心から服従し」と表現しています。伝えられた教えの基準とは、キリストの死と甦りによる神の救いのご計画のことです。その教えに、心から受け入れたことによって、主が私たちを義の奴隷としてくださいました。「信じる」と言っても、行ないがないならばそれは死んだも同然であるとヤコブは言っています。また、悪霊でさえ神が唯一であることを知っていて、震えています。ですから、口だけ、また表面的な告白が信仰ではなく、信仰とは、心からの服従を伴っています。

2B 聖潔への道 19-23

19 あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以

前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。

「あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方」と言っていますが、「奴隷」という言葉がローマ社会にいる人々にとっては、とてもありふれた言葉で、分かり易かったということです。神の恵みの中に生きることについて、それを把握するのが、ローマにいる信者たちには肉の弱さで難しろうと想像して、ローマの奴隷制度を例えにして話しているということです。ですから、私たちにはかえって、難しいかもしれません。奴隷という概念は非常に難しいです。しかし、敢えて言うならば、自分が忠誠を誓っているものです。日本人であれば、「私はこのような用事がありますから」と言って、いろいろなことに責任感を抱いています。こうした忠誠心ですね、これをただ一つ、神への忠誠にしてみなさいというように言い換えればよいでしょう。

神の自分の手足を捧げるという行為には、必ず行き先、結果があります。それは聖潔という結果です。私たちが主に明け渡している中で、聖なる御霊が働いてくださり、私たちの思いや言葉、行ないを清めてくださいます。かつては、汚れや不法に手を出して、そこから離れなれなくなっていました。あるいは自分は道徳的な人間だったかもしれません。それならば、高ぶりであるとか、無慈悲であるとか、自分の心に抑えられない衝動であるとか、決して自分が自由にされている状態ではなかったのです。しかし、キリストと共にその自分は十字架に付けられました。そしてキリストと共に甦り、新しい人になりました。だから、明け渡します。すると主が聖潔へと導いてくださいます。

20 罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。21 その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。22 しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。

罪から自由にされるか、あるいは神から自由にされるかのどちらかです。自分は神に縛られたくないと思ったら、その時から自分は罪に縛られた人間になります。そして、確かにあなたは神については自由であったが、どうだったか？その実は恥ずかしいことだろう？と問いかけています。神から自由にされている時にやっていたことは、人に言うことも恥じるようなことばかりです。罪の結ぶ実には恥です。そして行き着くところは死であります。

しかし、再び福音が書かれています。「罪から解放されて神の奴隷」となったとあります。これは主がすでにキリストにあって私たちにしてくださったことです。神の奴隷となった、キリストにあって神の所有の民となったので、私たちが自分の手足を義のために捧げていけば、その恵みが働いて、聖潔の実を結ぶことになります。そしてすばらしいことは、その行き着くところは、「永遠のいのち」です。私たちが、主の前に出る時には、非難されるところのない者、傷のない神の子どもとして出ていき、そして永遠の命を受け継ぎます。言い換えると、御子を信じる者は永遠の命を持ちま

したが、そこへ至る過程は必ず聖潔、聖められていくということです。永遠の命を持っているのに、汚れと不法の中に留まることは決してできないのです。

23 罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

罪については「報酬」と書いてあります。つまり、罪は私たちが行なってきたもの、その対価として死が与えられます。しかし、永遠の命は「賜物」です。上から来るものであり、無対価で与えられるものであり、主キリスト・イエスの内に隠されています。私たちは恵みを受けています。賜物を受けています。そのことによって、私たちの内に神の聖なる御心が成し遂げられます。私たちはただ、明け渡し、主がなされることを見ていくのです。主が命じられたことを何でもやります、という、僕の姿を取っている時、私たちは主人であるイエスが行なわれていることを目の当たりにするのです。

11; 私たちのアイデンティティーが変わった。罪に対して死んだ、そしてキリストにあって神に対して生きている。そうであると「みなす」。キリストの復活は将来だが、しかしその力が今の私たちにも影響を与える。罪の報酬である死に打ち勝つ復活の力は、罪のそのものの力にも打ち勝っている。

12; ここから、「捧げる」という行為である。捧げるは、明け渡すと言ってよいだろう。

「死ぬべきからだ」今の、死に至る体のこと。

原因、アダムによって罪が入り、病また死ぬべきからだになった。

備え、しかし十字架によって、罪からの罰が取り除かれ、癒しが与えられる、

完成、キリストが戻られると、罪そのものが取り除かれ、完全な体を受け取る。

過程、今、霊の癒しを受けており、罪の力が取り除かれ、癒しが与えられる。

「罪の支配」罪の性質「罪」the sin、ここではもはや古い人のことではなく、罪の性質のこと。

「ゆだねる」これが、以前の生活の姿。明け渡す、任せる。

「その情欲」外側の罪ではなく、内から出てくる欲望のこと。

13; 「あなたがたの手足」具体的な体の肢体

A military dimension is probably present since ὅπλα seems to have the meaning “weapons” elsewhere in Paul... Believers must consciously choose to place themselves at the disposal of their master, lord, and king. ...Sin is conceived of as a power to which believers must not submit their members as weapons for the purpose of unrighteousness. Believers should hand themselves over to God instead and employ their members as “weapons for the purpose of righteousness” (ὅπλα δικαιοσύνης, *hopla dikaiosynēs*).¹

13; 「死者の中から生かされた者として」復活の力によって、生きている。

15; 罪の中に留まる(1節)ではなく、「罪を犯そう」とある。

¹ Schreiner, T. R. (1998). *Vol. 6: Romans*. Baker Exegetical Commentary on the New Testament (324). Grand Rapids, MI: Baker Books.